

—サポートは、こういった場の提供以外でも？

【嘉山】もちろんです。利用できそうな店舗の情報を教えてあげたり、交流できそうな人を紹介したり……。何かしら動くことで、「私たちは大事にされている」ということが伝わり、それが仕事への取り組み方にも表れてゆくと思います。



静かで落ち着いた雰囲気の礼拝室

「送り出し機関の選択」は重要なポイント

—技能実習生の受け入れを検討する際、何かアドバイスはありますか？

【嘉山】とにかく「余裕をもって準備する」ということです。ビザの問題などもあり、受け入れには最低1年以上かかるケースが多いと思います。さまざまな世界情勢の影響を受ける可能性もあるので、計画通りにいかないことも視野に入れておくといいでしょう。

—まずは外国人材の送り出し機関に話を聞き、そこから準備を進めてゆく形ですね。「送り出し機関の選択」が一つのカギになりますか？

【嘉山】はい。残念ながら、中には技能実習生に多くの借金を背負わせているようなところもあるんです。“とりあえず送る”のようでは人材の質にも影響するので、しっかりとした機関を選ぶことが大切ですね。どのような職種で、どのような人材レベルを求めるかの大枠を決めた上で、各国の大使館や公益財団法人国際人材協力機構などで話を聞く形がいいと思います。

—嘉山さんは、現地に赴いて面接をされたそうですね。皆さんに会ったときの印象は？

【嘉山】介護職では日本語のコミュニケーション力もある程度必要になるのですが、言語のレベルの高さはもちろん、礼儀正しい印象を受けました。また、インドネシア人はイスラム教徒のほか、キリスト教

徒やヒンズー教徒の方もいるので、お互いの宗教を尊重しあう部分があります。細やかな気配りや、思いやりの姿勢も感じましたね。

—受け入れが決まった後、社内でビデオレターを撮影して現地へ送ったとか？

【嘉山】はい。先輩たち（技能実習生の1期生）が実際に働いている姿や職場周辺の様子のほか、日本人社員からの「待っています！」というメッセージも入れました。本人はもちろん、そのご家族にも安心してもらいたいですからね。

日本での経験を生かし、 祖国で活躍してほしい

—受け入れにあたり、日本人社員への説明で心がけたことはありますか？

【嘉山】事前に、面接時の動画を見てもらいました。技能実習生たちの「日本で働きたい！」という前向きで高い志をもった姿を目にしたことで、こちら側も「しっかり受け入れよう」という気持ちになれたかと。さらに、現地で一般家庭の様子も撮影させてもらったので、その動画も共有しました。ありのままの生活を見せることで、まったく異なる文化圏から来て働くことへの大変さや凄さ、理解が深まったと思います。

—最後に、今後の夢や目標をお聞かせいただけますか？

【嘉山】技能実習生が祖国に帰ったとき、日本で培ったことを生かし社会で活躍してくれたらうれしいですね。それは同時に、一緒に働いた私たちが「世界の役に立っている」と実感できることにもなりますから。また、近い将来、私たちが海外に出て「介護人材を育てたい」という目標もあります。「介護職が国際的な仕事になる」という夢の実現に向けて、これからも技能実習生、日本人社員とともに頑張ってゆきたいと思います。（取材・文／小林 真由美）

HARAPAN の
HP はコチラ
から→



さらに詳しい
記事が読める
ハマ街ビト
(番外編) は
コチラから
→

